

# 太平洋イカ類漁場調査 一抄録一

(開運丸：アカイカ漁場調査・東奥丸：イカ類漁場調査)

鈴木 史紀・田中 裕憲・白取 尚実

## 発表誌名

イカ釣り漁場開発資料XV（平成4年3月）及び平成元年・2年度外洋性イカ（スルメイカ、アカイカ）に関する生物測定、標識放流、海洋観測基礎資料集（平成4年3月）

## 抄 録

8月から11月に試験船開運丸により、東経160度以西の太平洋海域で主としてアカイカの北上期から南下期の群を対象に漁場調査を、6月から8月に試験船東奥丸で東経144度20分以西の太平洋海域でイカ類漁調査を実施した。

### ○ 釣り漁場におけるアカイカの動向について

#### 1. 八戸港におけるアカイカの水揚げ動向

アカイカの主たる水揚げ港である八戸港の1990年の水揚げ動向を見ると、近海域での生アカイカの水揚げ量は6トン余りで依然低調である。一方、沖合域（釣漁場）からの凍結アカイカの水揚げ量は1万トン余りで1986年以降では高い水準にあった。

#### 2. 分布密度（釣機1時間1台当り漁獲尾数）

8月上旬の東経148度以西海域の分布密度は沿岸側で低く（0.6から2.7尾）、沖合側で高かった（2.6から13.3尾）。8月下旬から9月上旬の東経156度以西海域では東経147度付近（19.9から50.2尾）並びに東経152度から156度付近（10尾以上の出現海域5点）の海域に比較的安定した分布がみられた。9月下旬から11月下旬の東経149以西の海域の分布密度は2尾以下と低かった。

#### 3. 群の移動

北上群（7月北水研資料）あるいは滞留群（9月青森水試資料）を対象に標識放流を実施したが、再捕率は低かった。（青森水試実施分3%）移動方向は北上群は北方向、滞留群は東あるいは南方向に移動がみられたが、従来と同じパターンの移動であった。

#### 4. 群の性状

近年小型化の傾向が続いているなかで1990年の魚体をみると（外套長23cmの小型イカの出現状況、平均外套長の推移等から）1982年以降ではやや回復の傾向がみられた。

### ○ スルメイカの動向について

#### 1. スルメイカの漁獲動向について

八戸港における1990年の水揚げは3,094トンで昨年の156%増でここ10年間では高い水準にある。一方、津軽海峡に面した大畑港では1,962トンで昨年の64%と低調であったもののここ10年間ではやや高い水準にある。

## 2. 分布密度（釣機1時間1台当り漁獲尾数）

定線海洋観測線上で実施したイカ類漁場一斉調査結果の平均分布密度は、6月下旬は4.7尾で昨年の4.9倍で1983年以降最も高い水準にあった。8月下旬は0.2尾で昨年を下回ったものの1983年以降では1990年に次いで高い水準にあった。また、7月25～26日に行った北緯41度31分、東経143度28分で24.4尾と近年ではまとまった密度がみられた。